

家具人

家具に携わっている人が今考えていること。家具職人が作る人、考える人、デザインする人たちのインタビュー対談

第2回 野崎 義嗣氏

前編



株式会社カロニデザイン代表・家具職人 1974年生まれ。インテリアの専門学校で家具デザインを勉強した後、有限会社秋山木工に入社。7年間の勤務を経て、北海道の株式会社匠芸へ。その後ドイツとフランスで約2年間家具製作に携わる。帰国し秋山木工で若手の指導を受けた後、2008年7月に株式会社カロニデザインを設立、現在に至る。

「家具作りを目指したきっかけは何でしたか。小さい頃から手を動かすこと、何かを作ることは大好きでした。進路を考える時に、美術や工芸に携わることがしたいと美術学校を受けたいのですが落ちてしまったので、インテリアデザインの学校に行きました。デザインという幅広の枠から、その時にインテリアを専らしていたんですね。高校生の時、周りに工務店や大工の屋敷がいて、その人たちが進路をはっきり決めていたんです。その影響もあって一時期は大工、それも大工がいいな思っていました。でも大工は集団で作るから、仕事を一人まじめられないのは嫌だなと思って。一集団行動は苦手です。チームワークとか人付き合いが苦手なの

で、一人で全部できるものは何だろうと考えたら、家具は手で持ち運びできて、身の丈という感覚が僕に合っている。建物を建てるにしてもスケールの大きさがどこかはないけど、家具なら手で触ったり座ったり自分の感覚で確かめられます。秋山木工にはどういったきっかけで入ったのですか。授業で秋山木工グループの家具屋に校外研修に行くと秋山社長から声を掛けてもらったんですが、家具デザイナーになるつもりだと伝えたところ「デザイナーになるにも職人の仕事を知ってね」といいたろ」と言われ、それこそだなと思って入りました。一職人になりたくて秋山木工に入ったのではないんですね。入るまでは木のことをも知らなくて、家具を作る上での単なる一つのマテリアルという認識でした。たくさんある材料の中で一つと捉えていて、もっといろんな素材を組み合わせた方がデザインとして面白んじゃないかと考えていたんです。そんな考えで秋山木工に入ったら、木工と職人、両方の世界がものすごく手とわけて衝撃的。木って動かし難く鉛筆や鉛筆の削りかたに比べても、人間が誕生してからずっと使ってきた材料だからもっともだし、他に比べるまでもなく木は特別なんだと思ひ知らされました。一職人の世界に衝撃を受けたというのは。職人の人たちが本当に真面目で、その人たちが誠実に一生懸命仕事をして、何とか良い品物を納められる。その世界に圧倒されました。それまでの自分を恥ずかしく思っていたのと同時に、職人の意識や技、気質を理解し、手に入れられるまで本当に頑張らなくて心の底から思いました。一徒弟制度で知られる秋山木工で4年間を雑を勤め上げ、その後3年間職人として働いた後、北海道旭川市の匠芸へ。

失礼な話なのですが、職人になってそれから結構、自分の射程距離よりはるかに彼方が人が見つけられなくなってくるんです。ほかの会社ではどんな仕事をしているのか、どう作業を進めているのか、どんなツールやものをやっているのか、もっと違う環境で家具作りを見てみたかったし、自分が外でこれほど通用するのかもしれないなと思いました。一匠芸を辞めたのは。今まで自分が働いていた所は区役所の大規模な環境、それに日本の家具産地として有名な旭川でもトップクラスの会社をやっていたので、職人としての任期の5年にはまだ1年早かったです。早期退社という形での転職でした。それまでの仕事のやり方は一壁任せられたら本人次第で、1〜8年やってきた自分でも「この方法なら絶対正しい」「こうすれば一番早い」というのが分かるように手探りしながらという状況が多かったです。それがコンプレックスでもあり、私試したかった。一移ってどうでしたか。まず、規模が全然違いましたね。壁も同じものを二気にやるから早いし、きれいで丁寧な上に安い。チームワークで大事ななどの時思いました。昔が力を合わせる充実感という。匠芸の社長も元職人だったので、能力だけでなく作り手の充実感などに対して理解のある方で雰囲気も良かったんです。僕はいつか職場を継続してきまじけど、上の人は元職人という人は多いです。やはり作り手の気持が分かるという点で。腕がある人の言うことじゃないと聞けない、という生真面目な性格なもので、多少人間性にも問題がある人でも、腕が良いなら言うことは聞けるというのがありますね。一秋山木工時代に抱いていたコンプレックスは匠芸で解消されましたか。最初は駄目でした。「使いものにならない」として、僕も5年近く、10年ほどやってる人たちから言われるんです。腕試しに来たという感じが入ったから、それは対抗意識を持たれますよね。そんなのがままならい

なる奴がいるんだ」と。でも一つ一つやっていくうちに「それでもないのか、じゃあ次はこれや」とってだんだん認められて、自分の領域が広がっていききました。そうすると信頼も得られて、任せられる。辞める頃には「いつまでいてくれるか、いいんだ」と言ってもらえて、組織の中で自分の方が認識されたらうれしかったですね。〈海外での家具作りについて〉一その匠芸を辞めて海外へ。日本一の家具産地、中でもトップクラスの会社にも自分の腕は通用するのだから、世界ではどうだろう。もっとも海外で家具作りをしてみたいという気持ちはあって、匠芸に入社して「将来は海外に行きたいです」という話はしていたんです。何言ってもなにかいっは、という感じはなかった。時間の余裕もあったので、駅頭勤務していた海外からブローカーが来て、いよいよ準備はしていました。そんな時に匠芸にドイツから研修生が来たので、その人を斡旋していた会社に自分も紹介してほしいと申し込みました。一それでドイツへ。仕事先は決まらないうまま行って、向こうで語学学校に通いながら探しました。ドイツに行く直前に結構したんですが、2カ月経っても働き口は決まらないう、収入もないというので一壁を日本に帰して、もう1年経った頃、給料やロクだけなアパートだけあってくれるという家具工場 (Möbel Exquisite, アーベル エクストラクター) で仕事が決まり、7月あす半年の契約でスタートしました。一家具作りはどうでしたか。もちろん方言や工員などに慣れはあっても、差はないと思いましたが、ただ、得られるものはあるところはここで働こうと考えるい

きませんでした。今ドイツで家具作りをしていて、この環境で働ける可能性はあるか、と聞いたらもちろん英語はできるから、と言われました。その後ドイツに戻ったら「1カ月給料なしならいい」という連絡が来て、約束通り1カ月働きました。最後の日にドイツに戻ると言ったら引き止められたので、給料や仕事のことを交渉して、そこで働くことになったんです。もちろんサポートでした。一慣れの仕事で働くのはどうでしたか。会社にもあるドイツも見たことのあるものばかり、インテリア関係の本をめぐればそこに載っているものばかりだったので、その一部を作っている自分に対して「ここまでできた」という感覚はありました。友人もうちの小さなものした会社でしたが、ウェグナーの椅子を作っている会社の中では一番仕事が残っているところだ、やりがいがありました。仕事に対する意識の違いは大きかったですね。日本だと、仕事がたまっているから日曜日は休むからという感じはなくて、休みの日だとそれはしない。欲しい人は待たない、というスタンスで、仕事のためにプライベートを犠牲にしないですね。P.P.エントナー社は作っている製品も素晴らしいし、社風もスタッフも好きだったので、一生いるつもりはありませんでした。そこではパートとして分業をやって、それを集めて完成させるという形態をやっていて、一から工場で自分で作りたいと思ってる僕は、ずっといられたらいいなと思っていました。そんなところから秋山社長から「日本を出て、年経ったら、そろそろ戻ってこないか」と連絡があったんです。一それは一緒に働こう、という誘いだいたんですか。秋山木工も動きながら若手の指導をして、ということでした。かなり良い条件を提示してくださるので、これを秋山木工を一年早く辞めてしまった不義理を返上できるかなという気持ちもあって帰国することに決めました。(次号に続く)

